

総合科学部の夏



⬆️ **ぼく審判**
「アウト！」
審判の判定は絶対です。



⬅️ **ぼくはバッター**
元野球部の意地にかけてもホームラン？



⬆️ **わたしはピッチャー**
渾身の一球。打たせてなるものか。

ソフトボール大会
恒例の学部長杯ソフトボール大会。梅雨に中休みがあったのか、中休みに梅雨があったのか分からなかった今年は、6月26日、炎天下の下行われた。

われわれ応援団 ⬆️
ナイスゴール…？



～たとえばこんなキャンパス・ライフ～

高谷先生大いに語る ⬆️



⬅️ 参加学生大いに聞く

先輩との対話 ⬆️

「自然環境研究
コースってどんな
イメージ持ってる
？」
「……。」



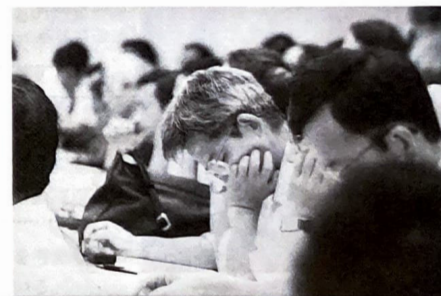
コース別ガイダンス

7月6日、7日の二日間にわたって行われた1年生向けコース別ガイダンス。

現在、総合科学部に存在するのは8コース。

1年生にとっては未知の世界の各コースの実態がこの日明らか…？

20周年記念シンポジウムからの
1コマ ⬆️
教官もお疲れです。(2日目より)



飛翔

第47号

表紙：榎原恵子／長谷川誠之
目次：長谷川誠之／八木茂樹

巻頭言ー創立20周年を迎えた総合科学部の課題：渡部三雄 …… 1

特集

総合科学部20周年記念考

総合科学部は何処へ行く

I部 歴代学部長かく語りき

式部久／天野實／戸田吉信 …… 2

総科20年、今堀先生ごめんさい：田中伸武 …… 6

II部 「21世紀へのパラダイムシフト」

成定薫／生和秀敏／長坂鈴／大村尚 …… 8

III部 あなたは総科を壊せますか？ …… 12

小特集1：学生の生の声 密室シンポジウム …… 14

小特集2：そうか！フレンドシップキャンプ …… 20

フレキャンスタッフの組織構成 …… 21

フレキャンに参加して …… 22

小特集3：学生 つくる 大学 西条

1 あなたの不満を聞かせて下さい …… 26

2 これでも去年とは大違い&今後の整備計画は？ …… 28

3 キャンパスづくり・まちづくり参加宣言 …… 30

4 社会からの声 大学移転・その後：平原秀則 …… 32

エッセイ：総科旅日記

人 富ゆえには 尊敬されず：松岡俊二 …… 34

砂防学の研究で各地をめぐって：海堀正博 …… 35

インド騙され日記：木本秋津／佐伯なおみ …… 36

ドイツで春を見たこと：平原靖子 …… 37

新任教官紹介 …… 38

岩上先生追悼文 …… 41

学部記事 …… 42

読者からの手紙（ホットライン） …… 47

編集後記

広島大学総合科学部広報委員長委員会・飛翔編集委員会



小特集2：そうか！フレンドシップキャンプより（フレキャンに参加して）



小特集3：学生 つくる 大学 西条より（総合科学部構内）

表紙・裏表紙について
総合科学部20周年行事からの一風景。また、裏表紙は総合科学部棟玄関に、設置された同窓会及び教員クラブ寄贈のモニュメント。総合科学部の新しい顔である。

創立20周年を迎えた総合科学部の課題

渡部 三雄（総合科学部長）

わが総合科学部は、今年創立20周年を迎えた。1974年6月7日に、人間性、創造性、総合性の三つの柱を理念として掲げ、専門教育と一般教育との一体化、新しい学際的、総合的な学問の創造を目指し、「日本の大学に新風を吹き込むニュータイプの学部」をキャッチフレーズとして誕生して以来、なんとか20才の成人式を迎えたことになる。

総合科学部にとり、20周年の今年はいろいろな意味で大きな節目の年といえる。まず、昨年春新キャンパスへの移転が完了し、プレハブや貨車を改造した研究室、廊下にまであふれた実験装置など、マスコミにも取り上げられた旧キャンパスでの悲惨な状況は解消された。学部の発展にとってのハード面での障害が取り除かれたいま、新しいキャンパスの立派な研究棟、教育棟の中でどのような新しい研究教育を行っていくのか、ソフト面での学部の理念、工夫と努力が問われている。

また、大学設置基準の改正、いわゆる大綱化による一般教育と専門教育の枠の撤廃に伴い、広島大学の全学部で新しい一貫カリキュラム作成の作業が進められ、この新カリキュラムのものでの教育が今年4月から全学的に出揃いスタートした。一方、大学院の整備・重点化に向けて、さまざまな案づくりが活発に行われており、広島大学の大学改革の動きは慌ただしい局面を迎えている。これらの事柄はいずれも総合科学部に深く関わっており、現時点における視点で学部の理念・目標を問い直し、将来像を確かめ直しながら、学部としての対応を図ることが必要である。

このような状況の中で迎える20周年の記念行事として、式典・祝賀会や記念植樹など、型通りの祝賀行事だけでなく、「広島大学総合科学部20年史」の刊行と「20周年記念シンポジウム」の開催が企画された。

「20年史」は、小林惇刊行委員長が「あとがき」に書いているように、次のような思いで編集された。まず、「総合科学部が如何なる必要性からどのようにして生まれ、学生たちがどんな学部かと問い続けるなか、如何なる紆余曲折を経て今日に至ったか、そうして今後の課題は何か、を讀みとって」いただきたい。そしてその中から、いま大きな転機に直面している総合科学部にとって、「20周年を契機として新たな出発の糧」を見いだしてもらいたい。

この「広島大学総合科学部20年史」は、創立20周年記念日である6月7日に出来上がり、6月11日記念式典・祝賀会の当日参加者に配布することができた。

一方、「20周年記念シンポジウム」は、「21世紀へのパラダイムシフトー転換期の大学と学問ー」というテーマのもと、7月1日、2日の両日にわたり開催された。ここにおいて、いま学問の世界に起こっている新しい動き、パラダイムの組み替えについて多面的に論ずるとともに、それとの関連において、大綱化を受けて全国的に進められている大学改革の意義を問い直し、21世紀の学問と大学のあり方を考える問題提起を行っていった。その中ではまた、総合科学部と共通の理念・目標を掲げる諸大学の学部の方達とともに、いわゆる新構想学部が新しい大学設置基準のもとで抱えている課題、新時代の大学の中で果たすべき役割などについての論議がなされた。

これら二つの記念行事が、学部の現状・将来を考える手がかりを与えるものとして役立つことを期待している。



学部長室にて

特集 — 総合科学部20周年記念考 —

総合科学部は何処へ行く

さる6月7日総合科学部は20歳になった。この“総科20周年”を記念して『記念式典』『シンポジウム』『20年史発行』といった行事が行われた。

総科構成員にとってはもはや聞き飽きたことだが、「既製の枠をこえた学際的・総合的研究を開拓し「広領域の専攻による裾野の広い教育」を行うという理念の下、総科は20年前のこの日創設された。以来20年間この理念の下、本学部は歩んで来たはずである。

20年という年月が、総科に対し適切な評価を与えるのに、十分な時間かどうかについては、さまざまな意見があるだろう。しかし今や総科と共に産声をあげ、同時代を歩んできた者が、学部の一翼を担う学生となっている。このように考えるならば、20年という年月は、何らかの判断を下すには十分な時間であろう。

今回の特集では一連の“20周年記念行事”を核に、学部長経験者、教官、卒業生、及び在学生それぞれの立場から、さまざまな思いを述べてもらうことにした。その評価は読者自身が行ない、その自らが下した評価に基づいて、今後の総合科学部生活の変革を行ってもらいたい。

1. 歴代学部長かく語りき

総科の20年はある一面では手探りの20年だったのではないだろうか。他に類のない「新構想学部」として作られた入れ物に、何を、どのようにいれていくか。学部の顔としての学部長がいかに考え、どのように行動していったかを見ることは総科の20年を振り返る一つの要素であろう。歴代学部長の思いを聞いていきたい。

学部発足の頃

式部 久 (第2代学部長、現広島経済大学教授)



自宅にて

総合科学部は教養部改革の決め手として、また日本の大学教育に新風を吹き込むという気負った狙いをもって、20年前に創設された。最近では京都大学、神戸大学、名古屋大学等々で類似の学部が誕生しているが、このことは

総合科学部の先見性を側面から裏付けることになるかもしれない。

教養部を換骨脱胎して新学部という構想は、大学紛争のさなか、大学改革委員会や教養部改革委員会の手で昭和44、45年頃から練られたものであったが、これを文部省との折衝で実現にまで漕ぎつけたことについては、飯島学長や初代の今堀学部長に負う所が大きい。文部省の関係部局に精力的に足を運んだばかりでなく、設置審議会の委員を個別に歴訪するなど、大変なエネルギーを注いだものだった。もともと学問的業績もあり、自信に満ちた弁舌に文部省も重い腰を上げたのではあるまいか。文部省としても広島大学をい

ゆる八ヶ岳の一つとして育てようとする意図があり、また教養部改革のモデルを探していたという背景があったとしても、最初から博士課程学部として学部を新設するというのは、私たちには異例のことに思われた。

発足してからも難問の連続だった。

まず教官陣容の整備。教養部教官140名をそっくりそのまま移籍したうえに、新規に80名近い新定員をもらっての発足だったのだが、その具体的な内容は決められていなかった。年度毎に新定員の割り振りを決める有様だった。毎年20名近い陣容を整備しなければならない。しかも、学際的な研究に実績のある第一級の研究者という注文である。

今堀学部長は「超一流」を招くために「特任教授」の枠を設けて特別待遇するという構想を示したりもしたが、これに対する抵抗も強く実現するには至らなかった。総じて学部長は進歩的、独創的であるのに対して教授会は保守的、平均的であり、教授会の席で業を煮やして上着を机にたたきつける一幕もあつたりした。不満が高じて学部長辞任を口にされることも一度ならず、私は辞任願いをあずかることも前後3回に及んだ。

有力な教授で、一旦は来任したものの「看板のみで内実がない」と捨科白してUターンするケースもあった。内実はこれから自分た

ちの手で自ら造るものだ、と密かに思ったものである。アメリカの有力大学の現役教授たちや4名のPh.D.保有者を含め、ほぼ予定の陣容が整ったのは6年目くらいだった。

看板の「総合性」についても、発足してから考えるというところが多分にあった。当面の具体的な展開としては学際的コースや副専攻制などがあげられるが



研究室の学生と

(副専攻制は複雑すぎるということで2年ほどで廃止になった)、いわゆる「総合」の哲学というべきものについては詳しい議論をしていたわけではない。今堀学部長は「総合科学を作っていく」との考えだったようだが、にわかに同調できないところがあった。

昭和52年、私は学部長になって間もなく、米英独仏の7大学を歴訪して教育論を交わしたが、Integrated Arts and Sciences と呼ぶその呼び名には多くの人々が興味と共感を示してくれた。研究教育を細分化から教おうという理念は、洋の東西を問わず、現代の共通のもののように思われる。

総合性の理念をどう具体化するかについては、引き続いての模索が必要なのであろう。

総科はおもしろい人間の集団だ！

天野 實 (第4代学部長、現広島工業大学教授)

私が東京の国立がんセンター研究所から総合科学部へ赴任したのは総合科学部の一期生が丁度三回生になり専門の実験実習が始まる一か月前であった。着任早々情報行動科学コースの専門実験のメニューをどうするか？ それに必要な機械器具の購入をどうするか等解決しなければならない問題が山積していた。総合科学部創設の理念についての話は聞いていたが情報行動科学コースは数理情報科学、有機化学、生物学、心理学を専門としておられる先生方の集団であることを知ってびっくりした。昔の学問分野の枠組にとらわれるこ

となく全く新しい情報行動科学の名にふさわしい研究教育をしなければならないとの責任の重大さを痛感させられた。



オリキャンにて：筆者中央

総合科学とは何かについては最近の飛翔に色々書かれているが要は45号に生和先生が書いておられるように特定の学問分野に限ることなく、複数の学問分野にまたがる学際的な領域や既存の学問的枠組みを越えた新領域の研究を推進することであり、教育としてはこのような新領域に対する知的関心を育成することである。幸い面白い人間の集団で、あまり深刻な喧嘩もせず、新任の先生が来られると今迄何をやってたか、今から総合科学部で何をやりたいかの話を聞いた後、懇親の意味で何処かへお酒を飲みに行った。異なる分野の研究者との交流は大変貴重な財産である。もちろんお互いの人間的信頼関係と積極的な努力なしには得られないものである。この様な知的関心の獲得は総合科学部以外では容易には得られないもので大切にしたいものである。



厚生補導係中村事務官(左)と

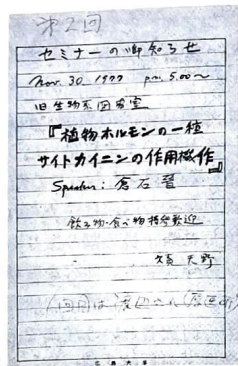
事務官との思い出だから話しても良いだろう。研究論文を外国の出版社から出したいとなると論文が受理されるより前に査読料をU.S.\$で支払わねばならないこともある。用度係へ行っても今までにやったことがない。本部と話してもやってくれない。カエルをアフリカの動物輸入会社から購入したいと夜中に国際電話をかけることにしたが簡単に事が運ばない。事務の人とは色々な摩擦があった。私がどんな広島弁で激しく喧嘩をしたかは皆様の想像におまかせする。事務官はその道のプロである。人間として対等の立場で話し合うことにより、生涯の良き友人が出来た。事務官と夜中まで流川で飲み、朝叩き起こされたら宿直室であった。酔いをさませと風呂へ入れてくれ、サンドイッチと牛乳で無理矢理朝食をさせられたら丁度一時限の授業の始まる時間だった。今日は〇〇の授業のある日だ

から教室へ行くと教えてくれる事務官が沢山いてくれた。感謝の言葉を知らず。

近くにおられる先生方が何を研究しておられるのかわからなくては今までの専門の枠をとりはらい、総合科学部の目指す学際的研究教育は達成出来ないと考えて、生命系の先生

によるセミナー第2回生命科学セミナーのポスターを始めた。先ず話をする人が少しお酒を飲んで、集まった人達もお酒を飲みながら話を聞くという非常に良かったセミナーである。灰皿を廻してお金を集め次回のお酒とつまみを買う資金にした。総合科学部の「生命科学セミナー」と名前がついたし、掲示の紙の色がピンクだったので誰云うとなくピンクセミナーの名前が定着してしまった。初め頃はテーブルを四角に置いて参加者の顔がみえるようにし、どんな素朴な質問でも気楽に出来るような雰囲気作りだけは努力したつもりである。正直な話、旧来の枠で云う専門分野の異なる人の話には知らないことが沢山あったし、誰か協同研究の組める人は居ないかと探すには非常にいい機会であった。学生を含めて集まる人も多くなりお酒なしの大きな教室でのピンクセミナーになってしまった。しかし今でも色々な角度からの素朴な質問が多く出るし、演者にとってもよい勉強の機会となっている。若い人達にとっては学際的研究を目指している人達の雰囲気が直接につたっていると自画自賛している。

教授会をなるべく短時間ですませて若い人の研究分野の話聞く機会を作ったのも同じ趣旨からであった。小野さんの「貼紙禁止」という紙を壁に貼る論理矛盾の話からはじまって、立川さんの「フランス革命と祭り」、岩田さんの「ウラジオストックの近況」、園府寺さんの「絵画の贋作」など今でも鮮明に思



い出せる楽しい話だった。

最後に一言、総合科学部の目指すものは自然発生的に出来るものではない。教職員学生一丸となって創設時の初心に帰り、積極的に学際的な新領域の開拓に努力してもらいたい。

たかどの 高楼に望む 一学部創設20周年に寄せて一

戸田 吉信 (第5代学部長、地域文化コース教授)

H君、原稿のことすっかり忘れていて、申し訳ありません。猛暑とはこれをしも言うのか、連日熱帯のど真ん中、思考は溶け、記憶はかすれておりました。先日教授会、端々から目があって、ああそうだったという次第。大兄はにやにや笑い、うなづいてくれたところを見ると、手を擦り足を擦りした私の腹話術、「アイヤ、イマシバラク」がどうやら通じたらしい。

式典・祝賀会、記念シンポジウムと続いた一連の行事、何とか成功裡に終わりました。大兄が「飛翔」編集委員長として、20周年行事のまとめ役をしていただいていることを、大変嬉しく思います。おかげで言えば、いささか夜郎自大になりますが、昨今の今頃漠然と思いついてたひとつひとつが、具体的な形で実現されました。何かをなした充実感を、学部全教官・全事務官とともに分かち合いたいと思います。とくに春秋に富む先生方が要所を所をしてくださることに、胸を熱くしています。忘却の淵の中で、すでにヘドロと化したのではないかと感じていた、大学紛争当時の熱気、学部創設時の連帯感が、ことによると甦ったのではないかと、ふとそう感慨さえ覚えるのです。

私はといえば、なんだか飲み食い席にばかり呼んでもらったようで、恐縮しつつも満悦至極の何日かでした。ただ、これはと、座り直した一瞬があります。

シンポジウムの2日め冒頭、蓮實重彦氏の基調講演はさすがに聞かせてくれました。手垢にまみれぬ、刺激的な言葉によってある言語空間が現出し、聴衆を快く挑発する。いわ

総科の学生諸君、大変ユニークな教官集団の精進の後ろ姿をみて幅広い教養を身につけ、しかも何か核になる学問の面白さをも得して卒業してもらいたい。総合科学部に有縁の人々の御健闘を祈る。

ば彼の手口、彼の戦略です。その空間の中で私は快楽を味わいつつ、実はその快楽こそ、考えてみれば大学の専売特許でなければならぬと思っていたのです。

だとすれば、そこで直ちに、蓮實氏の挑発を堂々と受けて立ててほしかった。思わず身を乗り出したのは、挑発されればすぐに乗っかってしまう生来の悪癖がむらむらと鎌首を持ち上げたからです。しかし、余計な口出しなどせぬほうがよろしい。シンポジウムは文字通り、粛々と進みました。私などは出来が違、パネラーの方々には真摯に報告され、まこと頭が下がる思いでした。ただし、いわゆる新構想学部の集まりは、全国教養部長会議の後を継ぐものであってはなりません。あくまで未来を向いて、本質を、ただ本質だけを語り合う場であってほしいと願うものです。

あえて言いましょう。現在の総合科学部、理想を語りつつも組織は硬直化しています。旧設置基準のもとで考えに考えて作った学部の体制が、設置基準が改定され、さらに学長大綱が承認された現在、そのままではいへないのです。教官数が減少することは覚悟したうえで、学部を柔軟に再構築する、そして真に私たちの学部にあふくわしい教養教育を提供していく、そうでなくて、どうして各学部が相応の教養教育を負担すべきだといえますか。余剰人員(妙な言い方ですが、適当な言葉が見つからないので)は広島大学の貴重な人的資源として、全学で活用方法を考える。これしかありません。後手を踏めば踏むだけ状況は悪化します。情報の問題、語学の問題、腹をくくる以外に根本的な解決は望めません。

私は今回の設置基準改定を、学部が思いきった大胆な教育を行う好機と捕らえています。総合科学部はその魁とならねばならないのです。



研究室にて

★初代学部長の今堀先生は、一昨年なくなられた。ここでは今堀先生にひかれて総科に入学した一卒業生にその思い出を語ってもらった。

総科20年、今堀先生ごめんなさい

田中 伸武 (昭和52年入学、現在中国新聞社)

総科創立20年祝賀会が開かれたちょうどその日の夜、サンフレッチェが初優勝を決めた。テレビに映るバクスター監督の胴上げを見ると、20年前(正確には19年前)のカーブ初優勝、コージ男泣きのシーンがダブってくる。

野球からサッカーへ。この20年で広島町の主役は入れ代わった。そごうも、総科も20周年を迎えた。高校生だった僕も一人前のおじさんになった。20年を振り返ることは、僕にとっては夢と希望にあふれた高校時代を懐かしく思い出すことでもある。

なぜ総科に入学したのか。社会正義実現のため、ヒロシマの平和問題を考えるため、総科で学ぼうとしたのではなかったのか。あこがれの今堀誠二先生の講義を聞くために総科を志願したのではなかったのか。入学した途端、浮かれた学生気分が浸りきり、落第した劣等生だけに、懐かしくも後ろめたい思いで20年前の自分を思う。

特に今堀先生に対しては、今も「借り」があるようで、何かせねばという思いが強い。

近況報告。私の研究室はまこと高^{なごとの}楼、緑下たる風景を眼下に望みつつ、この一文をしたためています。3月までは、帰りのJRに乗り込むとすぐ死んだように眠っていましたが、いまは誰彼となくコップ酒の相手をしてもらっています。こんな生活があったのかという思いです。後しばし、なかなか解放してもらえませんが、ここ広島大学時代の棹尾を飾ることができればと願っています。

西条の酒はうまいな。碁を打って酒を飲もう、と約束しながらまだ果たせないまま입니다。ぜひ、そのうちに。

粗にして雑な一文、万々、ご寛容のほどを。

20年を振り返るにつけ、今堀先生のことが気になる。

小生は、昭和52年入学。同年秋の学長選挙に破れて広大を去った今堀先生の講義は一般教育を半年間受けただけ。しかし、教室以外での思い出に印象的なことが多い。

まず、高校3年の時、平和記念館で広大の市民開放講座が開かれ、聴講に行った。

何人かの講師のうち、お目当ては勿論今堀先生。その前年に総合科学部という何だか訳のわからぬ科ができた。懐かしくも後ろめたい思いで20年前の自分を思う。



総合科学部新設、初代学部長としての今堀先生 (昭和49年7月29日)

な学部を作った産みの親として、また平和運動家として高校生の僕たちにも有名な人物だった。

「平和を作るにはどうすればよいか。皆さんわかりますか」

例のカン高い早口で受講生に問いかける。教室はシーン。

「簡単なことです。戦争をしなくてもいい状態を作ることです」

詭弁のような言い方、自信たっぷりの話しぶりで先生がとうとうまくしたてたのを、20年たった今でもはっきり覚えている。佐藤首相時代に政府の審議会メンバーを務めた経験を交え「沖縄返還が実現したのは自分の力によるもの」とホラめいた自慢話も確かにされていた。

当時、純真な高校生だった僕は、社会党が正義の味方だと信じていたし、森瀧市郎先生の「人類は生きねばならぬ」の呼び掛けにも素直に共感を覚えていた。「広大に行くなら総科で学ぶ。今堀に学ぶ。世界平和を実現するために学ぶ」のが、おかげさ言えば自分の使命感ではないかとさえ思ってきた。

入学して早々、1年生で学生名簿を編集することになり、その冊子に巻頭の辞をもらったこともあった。学部長室へ何度か足を運び、忙しい中むりやり頂いた原稿には「諸君がノーベル賞を取る人間になるよう云々」とあり、その目標の高さに感心させられた。

尊敬する一方、風刺のネタにもさせて頂いた。友人らで作った映画では、実際の話を下敷きに、学長選挙で負けた「芋堀」教授をパロディで描いた。

肝心の講義は、一般教育の「中国現代史」を半年間聴講しただけだが、最終講義の言葉はまた印象的だった。「私は学長になりたかったわけではありません。が、私が負けたということは、広大の改革路線が支持されなかったことです。だから私は広大を去るのです」。負け惜しみとも受け取れる、独特の「今堀ラップ」。それでも堂々とした演説だった気がする。あの最終講義を録音したテープ、どこへいったんだろう。もう一度聞き直してみなければ…。

その後、小生は平和研究どころか落第し、

やっとき卒業する有り様。入学時の青雲の志はみごとに惰眠と遊興にかき消されてしまった。けれども今堀先生に刺激された経験だけは最後の励みで、辛うじて社会変革への責任を感じる心の支えになっている気がする。新聞社に入り、成り行きで労働組合の専従になったのも、それがあったからかもしれない。



20周年記念式典にて：筆者(右)

一昨年12月、国際会議場で開かれた「今堀先生をしのぶ会」に参列した。式部先生のユーモアと思ひやりにあふれた弔辞に胸打られた。しかし、若い人の姿は意外に少なかった。教え子たちは広島にはあまり残っていないのだろうか。

今思うのは、その席で原田東眠医師が提案した「今堀賞」創設が、何とか実現できないかということ。他の先生らから事情が色々あるのだとも聞いた。もちろん今堀先生に金銭的な遺産はあろうはずはないので、ほかの我々で資金を募らねばならないが、社会的に信用のある別の先生が呼び掛けるなら進んで応募したい。そうした呼びかけは、まず飛翔から始めるべきなのかもしれない。

毀誉褒貶は確かに激しかった先生だと思う。周囲の印象も様々だろう。でも、ヒロシマの歴史、広大の歴史に今堀誠二の名前を改めて刻むのは我々総科生の責務でもある。総科がやらなくて誰がやろうか。「今堀賞」あるいは「今堀記念館」「記念雑誌」「記念文庫」「記念〇〇」を20周年をスタートに本気で考えるべきではないか。

カーブ優勝の前年、総科は発足した。サンフレッチェ優勝の前年、今堀先生は眠りについていた。広島を思いにつれ、今年こそ総科産みの親に恩返しする年だと思えてくる。落ちこぼれ不真面目落第生OBであるがゆえに、なおさら罪滅ぼしに何かせねばと思う。